

社会に役立つ人材を育てる

八木 茂典

中央大学理工学部准教授

はじめに

私は、医療機関の副院長職から2021年に転身し、現在は総合大学の理工学部体育教室に所属している。専門は「スポーツ医学」「リハビリテーション学」で、共通教育科目を担当している。授業を担当するにあたって、まずは大学体育について勉強する必要があった。

1. 大学体育の立ち位置

大学体育は、大学設置基準の大綱化（1991年）で大きく変化した。それまでは大学卒業のための要件として「120単位及び体育の4単位」が定められていたが、大綱化を経て体育の単位はそこから外された。入学定員数に応じて体育担当の専任教員数が定められていたが、これも廃止された。

大綱化以前（1947年）は、結核が流行した時代背

景から、大学体育の目的は健康な学生を育てることだった。しかし、大綱化によって、その役割は保健センターや学生生活課のものとなり、大学体育が担うものではなくなった。そうすると、大学体育の存続のためには改めてその必要性を示さなければならないが、説得力のある答えは示されず、私立大学の多くで体育は「選択」科目となり、体育教員の数も削減された。

大学進学率が過半数を超え、新規労働者を供給する中心となった大学に対し、産業界から社会人基礎力の育成に関する声が強くなった。2006年、大学は「教育を通じて、自立した市民や職業人として必要な能力を身につけさせること」を示した。実行に当たって、2016年「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の策定及び運用に関するガイドライン」が制定され、各大学ではディプロマ・ポリシーに沿った教育の提供が必要になった。

歴史が示すように、時代背景が異なれば、育成する人材像も異なる。教育は「社会に役に立つ人材を育てる」ものであり、本学では、体育を「他者や異文化に対する理解力を備え、他者と円滑にコミュニケーションを図る

ことができる」力を養成する科目として位置づけている。

2. 社会経験を生かした授業

次に私は、大学での授業の進め方について学ぶ必要があった。それまで教え方についての指導を受けた経験はなかった。2024年に私大連FD推進ワークショップに参加させていただく機会を得て、そこで初めて授業を行う際のコツを2点ご教授いただいた。1点目は、「この授業で何を伝えたいのかを明確にする」ことである。多くの学生は大学卒業後、社会に出る。そのため、私の授業は「社会に役立つ人材を育てる」ことをゴールとした。2点目は、「自分にしかできない授業をする」ことである。まだまだ大人と接した経験の少ない20歳前後の学生に対して、20余年の社会経験を持つ私だから提供できる授業があるはずであると感じ指導いただいた。

医療機関では患者のコミュニケーション力を評価し、カルテに記録している。コミュニケーションは、「発話」と「理解」との2つから成る。「発話」とは自分の考えや感情を相手に伝える行為であり、どうすれば相手にうまく伝わるかを優先して考える必要がある。「理解」とは相

手の発話の背景にある意図や感情まで把握することである。つまり、コミュニケーションとは、お互いに相手の心を読むために頭をフル回転させて、人と人とのあいだに共通のものをつくりあげる作業だといえる。これらの能力を「教え」、「育てる」ことが、大学体育の目的だと考えた。

3. コミュニケーション力を育てる

学生は多様なバックグラウンドを持ち、異なった出发点からこれらを目指すことになるため、その道順は一人ひとり異なる。具体的には、左記のような手法を用いている。

まず、2人1組でペアとなり、1分間お互いに自己紹介する。次に、4人1組となり、先ほどのペアの相手のことを他2人に対し、「この方は〇〇で……」と他者を紹介する。その後、4人1組で「Yes and（いいね、さらに）」ゲームを行う。例えば「新しいスマートフォン開発のアイデアを出してください」というテーマを設定したとする。1人目の人が「スマートフォンで撮影したお菓子がその場で実物となって現れ、食べることができる

といいよね」というアイデアを発表する。現実的である必要はない。2人目以降は、どんなアイデアであっても「いいね」と他者の発言に共感し、「さらに、こんな機能がついているともっといいよね」とアイデアをプラスしていく。

さらに、個々にプレゼンテーションの機会を設けている。話す相手が、1人、2人、3人の少人数、大人数と変化するれば、相手に合わせて話し方や、場合によっては話す内容も変化する。プレゼンテーションにあたっての十分な準備も必要になる。聴く側には、目を見る、頷くなど傾聴力が要求される。感想や意見を求める場合もある。教員が伝えることよりも、周りの友達の発言や行動から学ぶことの方が大いに有効であると感じている。

4. 「正解」ではなく「選択」

医療の世界では、間違った治療をすれば患者に不利益を与えてしまうので、常に「これでいいのか?」という自問自答と闘っている。「この治療法は死亡する確率が10%あります」と言われたとき、90%は成功するので「治療をする」と答える人もいれば、10%も失敗の可能性が

あって怖いので「しない」と言う人もいる。医療従事者はエビデンス(科学的根拠に基づいた知識)、臨床家の経験、患者の希望などを考慮し、現時点でその人にとってよいと思われるものを「選択」するのであって、「正解」があるわけではない。

大学での教育においても同じことが言える。高校までの教育は、全国一律の教科書を使って「正解」がある世界だけを扱っている。しかし、大学の教育では教員がその内容は面白いし学ぶ意義も大きいと思うものを取り扱うことが多い。そこで学ぶ内容は、その分野の主流の考えではなく少数派のものかもしれない。そうすると、授業で得た内容をどのように捉え、生かすかを、学生が自分の頭で考えることになる。大学は、学生が自ら思考し、「選択」する必要がある場所なのだ。

目まぐるしく社会が変化する現代、若者たちは厳しい選択を迫られていると思う。かつての第1次、第2次産業革命によって多くの農民が工場労働者となった。2015年の株式会社野村総合研究所は、第4次産業革命において、2030～2040年に日本の労働人口の49%がロボットやAIに代替されると発表している[※]。既存

の職をめぐって激しい「椅子取りゲーム」争いをするか、時代の変化に対応して新しい職へ行くか、自分で選ばなくてはいけない。新しい環境は誰だって怖いし、初心者なのでダメダメな部分が露呈する。しかし、「今のままでは良くない」と思った日から成長ははじまる。解のない時代の中で、学生には、自分の意志で選択し、失敗を怖がらず歩んでいってほしい。

おわりに

私の授業の履修者の多くは1年生だ。2025年、初めて担当した学生が卒業生となり、複数人が「先生の授業が一番役に立った」と伝えてくれたことは、非常に嬉しく思う。しかし、私の授業に否定的な教員、学生も存在する。様々な考え方があるので、日々勉強し、アップデートした授業を提供するしかない、と思っている。

最後に、私大連FD推進ワークショップ運営委員の先生方、事務局の皆様、一緒に学んだ参加者の先生方、送り出していただいた本学関係者に感謝申し上げます。

心・社会・身体 の健康づくりに寄与する

はじめに

聖カタリナ大学人間健康福祉学部は、2025年4月から「聖カタリナ大学健康社会学部」に名称を変更するとともに、既存の社会福祉学科と人間社会学科の教育内容を発展的に融合した「現代人間学科」を新たに設置する。この「健康社会学部」には、「現代人間学科」と現行の「健康スポーツ学科」の2学科を置き、学部教育研究をさらに進化させる。

1 学部開設のねらい

テクノロジーが目まぐるしく進化を続け、グローバル化の動きも活発化する中で、私たちの住み暮らす社会は日進月歩でより複雑なものへと変化しつつある。加えて、自然災害の激甚化（例…豪雨災害の頻発化・大

規模化）といった事態から見て取れるとおり、私たちの社会を取り巻く自然環境もまた、よりアンコントロールなものとなりつつある。

そのように、社会と環境の両面において激動の時代を生きる私たちは、かつてないほど大きなストレスに日々さらされており、これまでも増して、健康リスクの高まりが懸念されるところである。人々の健康を維持・増進・回復することは、現代社会の喫緊の課題と言えるだろう。

1948年に発効された世界保健機関（WHO）憲章では、前文において「健康」を次のように定義している。「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいう」（日本WHO協会訳）。今もなお世界中で広く使われているこの定義から、「健康」というものが「身体」の次元のみならず、「心」や「社会」の次元にも関わるものであることが分かる。

「心の健康」「社会の健康」「身体からだの健康」。これら3つの健康づくりに資する人材を輩出することを通じて、地域社会に広く貢献したい。そうした思いから、本学部は開設された。

2 各学科の特徴

このたび新たに設置された現代人間学科では、「社会・データ」「心理・メンタルヘルス」「ソーシャルワーク」の3コースが置かれ、心と社会の健康づくりに資する人材を養成する。ここで、心の健康づくりとは、心理教育や自殺予防活動、支援者のメンタルヘルス等を推進することの謂いであり、社会の健康づくりとは、地域活性化や共生社会、ワークライフバランス等を推進することの謂である。本学科の特徴は、これらの健康づくりの基盤となる、社会学、データサイエンス・プログラミング、心理学、社会福祉学といった複数分野の多彩な専門知識・資格を得ることができる点にある。数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）修了証明書、データサイエンス・AI実務ポート、ITパス

ポート、社会調査士、認定心理士、公認心理師（国家試験受験資格「大学における必要な科目」）、社会福祉士国家試験受験資格、社会福祉主事任用資格、介護職員初任者研修修了証明書等の取得を目指すことが可能である。

また、健康スポーツ学科では、「健康・レクリエーション」「コーチ・マネジメント」「教職」の3コースが置かれ、レクリエーション教育・トレーニング教育・スポーツ教育の推進、生活習慣病やフレイルの予防・啓蒙等、地域の人々の身体の健康づくりに広く貢献できる人材を養成する。中学校・高等学校教諭一種免許状（保健体育）、健康運動指導士受験資格、健康運動実践指導者受験資格、ジュニアスポーツ指導員受験資格、スポーツコーチングリーダー資格、レクリエーション・インストラクター資格、パラスポーツ指導員（初級）資格、社会福祉主事任用資格等の取得を目指すことが可能である。

学生たちには、本学部で心・社会・身体からだの健康づくりについて学び、現代社会が直面する喫緊の課題解決に大いに貢献できる人材に成長してほしいと願う。